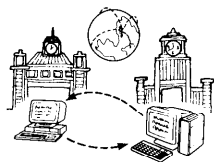


巻頭言

世界トップレベルの学会を目指して



山本 昌弘†



経済の回復が見えない厳しい環境が続いているが、単にバブル崩壊の影響に起因するだけでなく、むしろこれまでにない構造不況ととらえるべきでないかという見方が大勢である。情報処理分野で見ると、従来のメインフレーム中心の事業は米国のみならず世界で傾斜の傾向にあり、それに対してパーソナル、ソフト分野の先端ベンチャ企業が威力を奮っている。これはその根底には大きい技術革新の流れの中で、世の中に受け入れられる新しい技術に裏付けられていると考えるべきであろう。すなわち、新しい技術の革新によって生み出された新プロダクトが創出されたということを示している。

さて、21世紀の技術予測から見ても、情報、情報処理、情報サービスといった情報処理学会に関わる学術・技術領域に対する期待が大であることは多くの人々が認めるところである。また、この分野は知恵と能力の競争の世界であり、日本のように資源を持たない国にとって最適の領域であり、情報処理分野の技術・学術研究の重要性は改めて議論するまでもないところである。このような背景にあって、この分野を技術基盤としている本学会の活動に対する期待、責任が大きいということである。しかしながら、ソフト、情報処理分野が米国から遅れているという指摘はしばしばされ、その差は縮まるどころか益々広がっているのではないかと危惧されるところである。最近発表された米国の大学関係者による日本に対する評価では、ソフトウェアは米国から決定的に遅れており、将来はソフトウェアの弱さがさらに深刻になると予想し、日本に対しソフトの研究開発の徹底重視を指摘されていることは謙虚に受け止める必要がある。

本学会の会員はここ2,3年前から約3万人で低迷し、その結果財務も厳しい状況にあり、学会に

おいて昨年7月より学会活動活性化委員会を設置して検討に取り組んでいる。課題の中心の一つには財務体質の改善であり、今一つは学会活動の活性化による会員増加である。これまでの検討の結果、大会参加費の値上げ、別刷代の値上げをさせていただいて短期的対応を実施しているが、長期的には学会の魅力を上昇して一層多くの人に参加していただく学会作りが本筋であろう。米国の学会と比較してみると、ACMの会員数は約8万5千人、IEEE-CSの会員は約10万6千人となっており、これを人口比で比較すると本学会の会員はまだ増加してもおかしくない状況である。情報処理分野での発展を必要とする日本にとってみればさらに多くの人の参加を望むところである。しかしそのためには、それにふさわしい魅力ある学会活動であることがポイントであろう。

情報処理学会の活動は学会誌、論文誌、全国大会、研究会、セミナーが会員の皆様との接点の中心であり、これらの活動が会員の皆様にとって魅力と恩恵を感じるか否かがキーであろう。学会誌、論文誌を通して、また、全国大会、研究会、セミナーにより、世界最先端技術の情報が得られ、高いレベルの研究者・技術者間の交流を通じて相互に研究が加速され、ここで紹介される情報が新しい技術、プロダクトを生み出すものにもつながるといった会員相互間のメリットが重要であろう。要は本学会の活動において世界トップレベルの研究活動が実施されていることが本質であろう。冒頭に述べた、世の中の新しい革新につながる技術の芽が本学会の活動の中から出てくることが期待されるのである。すなわち、学会のレベルの向上が発展の基本であろう。そのためには、会員の皆様の積極的な参加が必須である。世界をリードする世界トップレベルの学会活動に向け会員の皆様のご支援ご協力をお願いする次第である。

(平成6年3月16日)

† 本会理事 日本電気㈱

